

助け合いの社会

(原文)

本田 咲 (17 歳)

東京都

法政大学高等学校

私は、東京育ちの、ごく普通の高校生だ。学校では、友だちの大半と価値観をある程度共有しているし、勉強も部活もまあまあ頑張っている。そのためか、私は、つい最近まで「今時の高校生なんて、大体私と趣味も悩みも同じようなものだろう」と思っていた。

この考えが間違いだと気が付いたのは、ある全国の高校生による会議に参加し、地方在住の高校生と、地域格差について議論した時だった。私は地域格差と聞いて、とっさに高校で習った知識である、教育格差について思い浮かべた。しかし議論が進むにつれ、この問題に対する自分の認識の甘さを痛感した。

この会議に参加するまで、教育格差という言葉は知っていても、具体的な状況を想像したことはなかった。しかし議論の中で、私立中学自体が希少であり、中学受験をする小学生がいない地域も珍しくないということや、都心の大学への進学を志しても、多くの大学を見て回ることは困難で、大学選びもままならないということを知り、驚愕した。同時に、自分が都内の恵まれた環境に住んでいるにも関わらず、地方の社会問題に目を向けていなかったことへの恥ずかしさを感じた。せっかく高校で習った社会問題を、全く自分事として捉えていなかった自分が情けなかった。

私がここから学んだことは、「勉強とは、テスト勉強のために知識を詰めこむことではない」ということだ。そして私が見つけた勉強の本来の意味は、「習った知識に自分の意見を加え、社会に還元する」ということである。

そこで、少しでも自分の考えた「勉強」を実践すべく、格差社会の問題に対し、一つの行動を起こした。それは塾に通えない小中学生のための質問教室に、ボランティアとして参加し始めたことだ。既に10回以上参加しており、教える度に「分からなかった問題が分かるようになった」や、「次も質問教室に来るのが楽しみだ」と言ってもらえることが私にとっても大きなやりがいをもたらしてくれた。

この活動を通して、さらに多くのことを新たに学んだ。最大の学びは、人間社会の本質とは、一方通行の「与える」関係ではなく、相互補完的な「助け合い」であるという気づきだ。活動に参加し始めた当初の私は、「自分は恵まれた立場にあるのだからそれを活かして、困っている子どもたちを助けることで社会貢献したい」という気持ちのみが前のめりになっていた。しかし質問教室に来る小中学生との交流を通して、自分も様々な面で成長していることに気がついた。例えば、以前の私は人見知りで、

初対面の人に自分からはなかなか話しかけられなかった。だが小学生が質問しやすい雰囲気を作ろうと試行錯誤する中で、コミュニケーション能力が高まり、結果的に日常生活においても、対人関係がうまくいくようになった。このような自らの成長を実感した際、先の活動が、相互補完的なものである事に気がついたのだ。確かに私は良い教育を受けられる機会に恵まれ、勉強という点においては彼らに「与える」存在だった。しかしそれは、私が彼らから学ぶことが何もないという事を意味しない。むしろ自分の得意な勉強を教えるということを通じて、新たな経験をさせてもらうという、相互補完の関係だったのである。

私が始めた、身の回りの数少ない小中学生の勉強を手伝うという活動が、すなわち、格差の是正に直結するわけではない。しかしながら、私がボランティア活動を通して気がついたように、相互補完的な関係が全ての人の中にあることを、皆が意識することができれば、現代社会も「互いに無関心な個人の集まり」から、「人と人とが協力し、支え合うことの出来る、助け合いの社会」へと変わっていくのではないだろうか。互いを尊重し合い、あらゆる人の長所が活かされる社会の実現こそが、平和な未来への一歩だと、私は信じている。